

テオドール・W・アドルノにおける 形而上学の希望としての身体

— 『否定弁証法』第3部第3章「形而上学についての省察」をもとに —

高橋 奏子

0. 序論 — 問題設定

テオドール・W・アドルノ（1903～1969）はフランクフルト学派に属する20世紀ドイツの代表的な思想家の一人であり、特に美学分野や社会批判における彼の業績は大きい。近年でも2019年に彼の講演『新たな極右主義の諸側面』が出版されると、2020年4月時点で売り上げ7万部を突破するという異例の反響を呼ぶなど、今なお彼の思想はアクチュアルなものとして社会に影響を与え続けている。それにもかかわらず、美学、社会哲学、哲学理論と主題が多岐に渡るがゆえに、アドルノの思想が包括的に論じられることはほとんどない。

しかしアドルノが思想全体の基本姿勢を明らかにした晩年の主著の一つとして『否定弁証法』（1966）がある。難解さと分量の多さ、アフォリズム形式の文章などの理由から、とすれば主題がわかりにくく思われるこの著作は、一貫して一つの主題に貫かれている。それは、「否定弁証法」という思想を通じて考える、今日の哲学の、ひいては形而上学の可能性である。このことは『否定弁証法』の序論と構成にすでに示されている。序論にて彼は形而上学を念頭に置き、経験との接続不可能性により哲学を批判する¹⁾。そしてこの書は「形而上学についての省察」という章で終わりを迎える。一見アドルノと形而上学は折り合いが悪いように思われるが、『否定弁証法』全体を貫く主題は今日における形而上学の可能性と言えるだろう。アドルノが記した初期の最も有名な著作は、第二次世界大戦の最中に執筆されたホルクハイマーとの共著『啓蒙の弁証法』（1944）であり、その著作が、なぜ人間が啓蒙ではなく一種の野蛮状態に陥るのかという問いに対する応答を目指すものだったことは広く知られている。対して『否定弁証法』は、どうすれば野蛮状態を防ぐことができるのか、という実践的な問いに向き合っているものだ。つまり彼はこの問いに対して、形而上学をもってして応答しようとしているのである。

これまで、いかにして野蛮状態を防ぐかという問いは主にアドルノの美学思想において盛んに論じられてきた。近年の日本国内に限っても、例えば上野（2017）がアドルノが時間の経過とともに移り変わっていく音楽に自然の真理との共通性を見出していることを指摘している他、藤野（2019）はアドルノが「美的経験」のうちにユートピアへの回路を認めていることを指摘する。確かにアドルノが「啓蒙」を乗り越えるモデルを美的経験のうちに見ていることは疑いようがない。しかしそれは彼が美的経験という領域でしか思想を展開できなかったということではない。

杉内(2019)がアドルノの美学の消失点として形而上学があると指摘する通り、美的経験が真理内実を把握する場として論じられている限り美学も形而上学に還元されると言えるのであり、アドルノの形而上学思想はそれ自体大きな価値を持つ。したがってアドルノの形而上学思想の把握はアドルノの思想全体を理解する上で重要である。

しかしアドルノの形而上学思想に関する先行研究は未だ十分とは言えない。その理由として、アドルノ独自の言い回しや難解な文章はもちろん、彼の形而上学思想が、彼が他に中心的に論じてきた美学や社会哲学と切り離すことができないために、形而上学思想のみの把握が困難であるという点がある²⁾。

そこで本稿は、アドルノの形而上学思想を把握するための補助線として、美学でも社会哲学でもなく、「身体」に立脚することを試みる。なぜなら、野蛮状態へと至ってしまう原因である同一化を解体する契機として「身体」が挙げられるからだ。美学、社会哲学、そして純粋な哲学理論というアドルノが主に論じてきた三つの分野に共通するものとして、主体の「身体」が考えられる。したがってアドルノにおける身体の役割を示すことは、これまでそれぞれの分野で別個に語られてきたと考えられているアドルノの諸思想、つまり美学、社会哲学、哲学理論の全ての前提として身体を位置付けることとなるのではないだろうか。そして身体という視座を通じて、アドルノが今日における形而上学の可能性を唯物論的なものとして提唱しようとしていることが示されるだろう。このことを示すために主に論じていくこととなるのが、『否定弁証法』の最後の章、すなわち第3部第3章「形而上学についての省察」である。

本稿は以下のような構成をとる。第1節は、アドルノ独自の形而上学思想について論じる前提として、同一化と伝統的な形而上学への批判を扱う。1-1では、『啓蒙の弁証法』を用い、アドルノの全ての思想の動機となっているとさえ言える同一化を引き起こす自己保存の原理について確認する。このことはアドルノの認識概念と密接に結びついている。次に1-2では、『否定弁証法』第3部第3章を主軸に、彼の形而上学についての講義などを手がかりとしながらアドルノが従来の形而上学をどのように批判しているのかを論じる。ここで念頭に置かれている形而上学は二つある。一つは、ドイツ観念論を中心とする「思弁的形而上学 die Spekulative Metaphysik」であり、もう一つは、アドルノと同時代に活躍した哲学者、ハイデガーとヤスパーズに代表される「死の形而上学 die Todesmetaphysik」である。「思弁的形而上学」は、絶対者を人間の思考のうちに切り縮めることで同一化し、無限なるものを有限へと押し込めてしまうために失敗する。また「死の形而上学」は、死を意味あるものに高めることにより、現実の生をむしろ無視してしまうとアドルノは批判する。

ではアドルノが考える今日の形而上学の可能性は何か。つまり、「非同一なもの」を救いうる形而上学はどのようなものか。第2節では、「身体」という観点から『否定弁証法』を把握し直すことを通じて、この可能性への道筋を提示する。2-1ではまず、アドルノ独自の形而上学へと論を進めるために、1-1で論じた認識を反省させるものとしてアドルノが考える「経験」について確認する。このことを通じて、アドルノが経験に「非同一なもの」を見てとり、経験を可能に

する身体を前提として「唯物論的」な思考を求めていることが示される。身体の重視を把握した上で、2-2では、再び『否定弁証法』第3部第3章を読解することによって、アドルノ独自の形而上学へと論を進めるために、形而上学と身体がどのように結びつくのかを論じる。ここで重要となるのが、アドルノ自身が形而上学の希望として据える「変容した身体 *der verklärte Leib*」という考えである。最後に、第3節では、本稿によって明らかになった身体の重視が、彼の形而上学思想や美学分野といった諸分野で展開しうることを論じる。以上のことを通して、身体という観点からアドルノの「唯物論的形而上学」を把握するための基盤を作り上げることが、本稿の目的である。

1. 認識と従来の形而上学

1-1. 同一化と認識

いかにして野蛮状態を防ぐかという問いの応答としてアドルノの形而上学思想を捉えるために、そもそも野蛮状態がなぜ起こるのかという問いに対するアドルノの考えを確認しておかなければならない。したがって初めに、『啓蒙の弁証法』において論じられる自己保存の原理と同一化、そして野蛮について概略を確認する。

アドルノの思想は同一性批判としてよく知られているが、彼は同一化全てを批判しているわけではない。なぜなら彼は思考自体を同一化のプロセスだと考えるからだ。認識の観点から言い換えると、それは、主観が、客観に含まれている把握を拒むような「非同一なもの」すらも同一化することで客観を概念化することを意味する。この同一化のプロセスは、主体が絶えず自己保存のために自己同定を行わなければならないということを出発点としている。自己はそもそも自己保存の遂行を本質的にその機能に有しているため、自己保存の原理として主観は客観の同一化を行うことを免れない。これは主体が主体としてあるための前提である。アドルノの思想は、同一化そのものが全て批判の対象であると考えられやすいが、そもそも思考するということは同一化を行うことであるため、同一化そのものは価値判断の対象ではない。

ではアドルノは何をもってして同一化を批判するのか。『啓蒙の弁証法』の始まりの一文を引用しよう。「古来より、進歩思想の最も広い意味としての啓蒙は、次の目標を追求してきた。つまり、人間から恐怖を取り払い、彼らを支配者として位置付けるという目標を」(3-19)。このように、彼の批判は「非同一なもの」を省みることなく同一化のみを押し進めるという点にある。恐怖や不安定さから逃れるために、主体は思考によって本来は把握しきれないはず客体を諸素材に分解し、事物の本質を普遍的なものとして概念化し、同一化してしまう。このような同一化を通じて、主体はあたかも客体を支配し、思い通りに扱えるような錯覚に陥る。ここに主体が支配者として君臨し、客体が物象化されるという図式が生じる。しかし、このことによって、客体が空虚なものとなるのと同様に、主体も体系のなかに組み込まれた空虚なものとなるという問題が生じてしまう。なぜなら、同一化の過程が数式のように全ての主体において同様に行われるなら

ば、その主体の固有性は不必要となるからだ。このように、主体は同一化によって客体を支配しようとすることによってむしろ単なる主観であればよくなり、自己はその唯一性を奪われ、代替可能なものとなる。「全能なる自己は、単なる所有に、抽象的な同一性になる」(3-26)。以上のような状況において主体が生き延びるには、主観として対象を概念化するという同一化の営みのみを放棄するのではなく、むしろ同一化を行なう一切の主体性を放棄するしかないが、このような自己否定もまた合理的同一性による自分自身の同一性を回復を目指さざるを得なくなるという袋小路に陥り、野蛮に至ることを余儀なくされる³⁾。

以上のことから、アドルノは野蛮状態に陥らないために、自己保存の原理による同一化という過程を主体が否応なしに行ってしまうことを把握することを通じて、同一化したものをそのまま固定化させることがないような思考プロセスを、つまり断続的な自己反省を目指すのである。

1-2. 形而上学批判 — 「思弁的形而上学」と「死の形而上学」への批判

アドルノの形而上学思想について論じるにあたり、アドルノによる従来の形而上学への批判を論じる必要があるだろう。批判される形而上学は、『否定弁証法』において示されるように、「思弁的形而上学 die Spekulative Metaphysik」と「死の形而上学 die Todesmetaphysik」である。

「思弁的形而上学」については、アドルノが特に念頭に置いているのは絶対者についての思想⁴⁾である。すなわちアドルノの関心は、一切の限定を有しない、それ自体自立的で無限な絶対者を、有限な人間がどのように思考できるのかという点にある。アドルノの結論は端的に、絶対者が人間とは全く異なる存在である限り、そもそも絶対者それ自体を思考することはできないというものだ。そしてそれゆえ絶対者について語ろうとする思弁的形而上学は批判される。というのも、上述した通りアドルノは思考を同一化の働きと考えるからだ。思考することは、一つ一つの事物を既知なものとして規定し固定化する、つまり同一化することである。目の前のコップを見て、コップであると考えすることは、これとしか言いようのないそのものを、食器であり、コップであると抽象化し、その抽象を固定化することによって可能になる。

では絶対者についてはどうだろうか。絶対者は感覚することが出来ない、つまりこれということが出来ない、圧倒的な隔たりの向こうにある他なるものである。しかし思考は須く自己保存の原理と結びつき、同一化を行う。したがって、絶対者それ自体について思考しようとする、絶対者を既知のものに当てはめることとなるとアドルノは考える。無限なものであった絶対者はこうして、有限なものに留まることを余儀なくされるのである。「絶対者のさまざまな同一化は、絶対者を、同一性原理の源である人間に置き換えてしまう」(6-398)。絶対者は他なるもの、つまり同一性の彼方にあり同一化を拒むような、概念化不可能な非同ー一なものである。したがってそのような絶対者の思考のためには、絶対者を思考するという図式がそもそも破壊されなければならない。つまり、絶対者の現れには、同一化という主体の思考様式による絶対者の把握を断念することが必要となる。

思弁的形而上学と並んでアドルノが批判する従来の形而上学として、「死の形而上学」がある。

もともと死に直面した人間の無力さが経験の境界を越えようとする思考の、つまり形而上学の原動力となると言われてきたことから、死は伝統的に形而上学の入り口として利用されてきたとアドルノは述べる。実際、アドルノと同時代のドイツの思想家であるハイデガーやヤスパーズの思想には、死を意識することによる本来的自己への回帰という構造が見られる。

しかしアドルノは、死の形而上学は無力であると批判する。この考えには、アドルノにおいてそもそも形而上学をはじめとする一切の哲学が文化、つまり現代の生のあり方と結びついたものでしかあり得ないということが前提になっている⁵⁾。

アドルノによると、そもそも現代を生きる人間の意識は死の経験に耐えることができない。人間は確かに、他の動物とは異なり明らかに自らが死すべき存在であるという事実を知っている。しかし同時に、われわれはそれぞれの瞬間に、自らが死なねばならないことを思い浮かべているわけではない。つまり死は、今や主体にとって外部にあるものとなっており、他律的なもの、私の自我とは疎遠なものとしてのみ経験されるのである。

しかしなぜそれが現在を生きる人間の意識に限定されるのか。それは近代以降、死を人生の終焉とし、生への一体化と捉えるような叙事詩的な感情が失われたからである。その理由として、例えば車の登場により以前よりずっと事故に遭う人が増えたことや、病院の設立によって死が非日常的なものへと隠匿されたことなどが挙げられる。われわれは日常において不幸な突然の事故に出会う機会は増えたにも関わらず、直線的な人生の終焉という形での老衰や虚弱による死を目にする機会は減少した。それゆえ現代においてわれわれは、死を「偶発的なもの」として経験することとなる。

そして、現代において死の概念を最も変質させたもの、それこそが「思弁的な形而上学的思想が経験と一致するための基盤」(6-354)を破壊したアウシュヴィッツである。アドルノは言う。

一人一人の人生経験の中で、なにか、人生の流れと一致するようなものとして死が生じるなどという可能性はもはや全くない。個人に残された、最も哀れなものである死の個別性さえ没収された。収容所においてもはや個人は死なず、死んだのはサンプルだった。(6-355)

収容所では人間は画一化され、個人は個人として死ぬことはできず、サンプルとなり、死体として生産されるだけとなる。それは生すらも代替可能となり、すでに一人一人の生命がどうでもよいものとなっていることを示している。ホロコーストの終焉によっても、再びわれわれが死に意味を見出し、生と死の繋がりを信じることができるようになることはない。「このことから抜け出せることは、収容所の、電流の通った鉄条網の外に出られないのと同様に」(6-355)不可能である。したがって、アウシュヴィッツ以降を生きるわれわれは個人が代替可能な存在だと知った上で、自分を重要な存在だと思い込むことしかできないのであり、それゆえわれわれにとって、もはやいかなる存在の肯定についての主張も虚偽のものでしかなく、さらにこの苦悩は「永遠に続く」(6-355)。

永遠に続く苦悩に対する応答として、偶発的な死の経験を疑い得ないものとするだけで不十分である。そのため現代で死の形而上学を語ることは、死を意味あるものへと高めることとなり、それは結果として、例えば国家のために命を賭けることのみが自らを自由にすとか、死を前にしては口を閉ざす覚悟のみが立派であるという言説のように、プロパガンダへと墮落する。もしくは、死の形而上学はただ人間は死すべき存在であるという明白な事実を繰り返すのみとなる。それゆえアドルノは死の形而上学を「経験の統一性を人間が失ってしまったという事実に対する虚しい慰め⁶⁾」に過ぎない無力なものだと批判し、偶発的な死ではなく生のあり方を問題に据える⁷⁾。

2. 経験と「唯物論的形而上学」

2-1. 「非同一なもの」と経験

思弁的形而上学と死の形而上学という二つの伝統的形而上学を批判するアドルノが求める、今日の、すなわちアウシュヴィッツ以降の形而上学とは何だろうか。それは同一化を乗り越える形での形而上学であり、そのためには、超越ではなく身体性に重きが置かれる。このことを示すための手がかりとして、まずアドルノの思想において身体がどのような立ち位置を有しているかを明確にしなければならない。

そもそもアドルノにおいて、身体は「非同一性」と密接に結びついている。このことは、アドルノの「経験」概念に関わっている。アドルノは経験を「常に矛盾したものとして現れる何らかのものを、意識の統一のなかで調停することを拒否する」(6-115) ものと定義する。われわれは絶えず世界の何かしらを経験し、それからそれを概念として把握するという認識を行うが、経験は認識即ち同一化の思考によって取りこぼされてしまう非同一なものをも含んでいる、ということだ。つまり経験は認識に還元されない。このような経験は、われわれが身体を持っていることによって可能となる。身体的契機は確かに同一化の過程で精神に取り込まれてしまうが、そもそも身体的契機が生じて感覚が起らなければ精神の省察は始まらない。つまり感覚が生成し主観を生じさせるものとしての身体が、われわれに認識の前提を提示している、ということだ。例えば、私がAは熱いと認識するためにはAを知覚しなければならず、知覚のためには身体、そしてそれから与えられる身体的契機によって生じる感覚が必要だ。したがって「身体的契機 somatisches Moment なしの感覚はない」(6-193)。そしてAを触れたことによる痛みを熱さによるものと判断し、Aは熱いと認識する。このように身体的契機は認識の前提であり、また同時に、認識の不安定要素として意識に統一されず絶えず認識を揺るがすものとして残る。認識がどれほど進展したとしても、身体的契機が同一化されることはない。それゆえ、この身体的契機が主観に自己省察のきっかけを与え続けることが出来る⁸⁾。

自己保存の原理がある限り、主観は思考し、対象に対して同一化を行う。このことは価値判断の対象に入らない前提である。しかし身体的契機が生じたという経験は、同一化できないものを、

つまり非同一なものを含み続けている。むしろ、同一化を経ることを通じて非同一なものはその度に生じてくる。したがって主体は自己反省によって意図的に認識を手放さなければならない。そしてこのように身体と精神の関係を常に反省し続けようと努めることをアドルノは「唯物論的 materialistisch」と呼ぶのである⁹⁾。

2-2. 形而上学の希望としての「変容した身体」

アドルノの思想において身体が重要であることは、どのように形而上学と関わるのだろうか。アドルノは従来の思弁的形而上学と対置させる形でキリスト教の教義を挙げ、次のように言う。「魂の目覚めと肉の復活を一緒に考えるというキリスト教の教義は、[思弁的形而上学よりも]形而上学的により首尾一貫していた。思弁的形而上学よりも一層啓蒙されていたとも言えるだろう(6-393)」。アドルノの伝統的な形而上学批判は上に記した通り、絶対者それ自体について思考しようとする絶対者を既知のものに当てはめることとなるために無限な絶対者が有限なものに置き換えられてしまう、というものだった。そういった思弁的形而上学と、アドルノがより形而上学的であると考えたキリスト教教義の差が、「身体 Leib と魂 Seele の分離」(6-393)の有無である。つまり、それは思弁的形而上学は身体と魂を分離させてしまったが、キリスト教は、復活が単に精神的なものではなく身体を伴っているという差異である。そして、思弁的形而上学を批判しながらも、キリスト教思想を論じるのではなくあくまでも形而上学の可能性を模索するアドルノは、形而上学の希望が「変容した身体 den verklärten Leib に縫い付けられている」(6-393)と述べるのである。

しかしこの「変容した身体」が意味するところは何だろうか。第一に注目すべきはその一文である。前後の文脈を含めて引用する。

全ての形而上学的な思弁はしかし、聖書外典の運命へと突き放される。超越性という構想に潜むイデオロギー上の非真理は、肉体と魂の分離であり、この分離は、労働の分離を反映したものである。この分離は、思惟する実体 *res cogitans* を自然支配の原則として崇拝し、そして物質的なものを断念するという結果になる。この断念は超越という概念によって、罪関係の向こう側で解消するとされる。しかし希望は、ミニヨンの歌においてと同様に、変容した身体に縫い付けられている。(6-392~393)

超越という彼岸ではなくこの世の現実の身体において肉体と魂の分離を解消することで希望が生じるとアドルノは考えるが、そのことを示す例として挙げられているのが、引用が示すように、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』第3巻の冒頭にあるミニヨンの歌だ。第2巻14章において、ミニヨンは苦痛を堪えるように胸に手をやり、ヴィルヘルムの接吻に応えることなく突然叫び声を上げ、身体中を痙攣させ、泣き続ける。ヴィルヘルムはそのときふと、彼女がこのまま溶け去ってしまう恐怖にかられ、彼女を強く抱きしめながら「ぼくの子だ」と語りか

けた。するとミニヨンの顔が明るさに輝き、ヴィルヘルムに「わたしのお父さん」と呼びかけるのである。そうして2巻が終わり、3巻の冒頭で、遙か遠くの南国の生への憧憬を歌ったミニヨンの歌が記される。

もちろんアドルノは、南国の生への憧憬のようにどこか遠い彼方に形而上学の希望を見出していたわけではない。このことは『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』でゲーテがミニヨンの表情が和らぐ際に *glänzen* (輝く、煌めく、際立つ) という動詞を使用していることから考えられるだろう。なぜアドルノは、「ミニヨンの歌においてと同様に」と自ら示しながらも、*verklärt* という形容詞を用いたのだろうか。

ここでアドルノ自身の思想からは逸れるが「変容した」と言う形容詞 *verklärt* に着目したい。*verklärt* の一般的な意味は輝かしい、明るい、にこやかな、などであり、一見すると *glänzen* と似たような意味合いを持つ。しかし、キリスト教の文脈では *verklärt* は「変容した」という意味を持つ形容詞である。さらにキリスト教的にも、「変容」は二つの意味を持つ。第一の意味は、マタイ 17章 1-8節に示される、それまで人性によって隠されていた神性を自己啓示した光り輝くイエスの身体だ。イエスはエルサレムへと向かう途中、三人の弟子を伴って山に祈りを献げる。その際、イエスの「顔は太陽のように輝き、服は光のように白く」なる。このことによってイエスは自らの神性を明示した。またそのとき、モーセとエリヤが現れ、光り輝く雲の中からは神の声が聞こえてきた、という話である¹⁰⁾。一般にキリスト教の文脈で「変容」となると十字架に架けられたイエスの死と復活が想定されやすいが、*verklärt* が用いられるのは生前のイエスの上述のエピソードにおいて、つまり人間だったイエスが自ら神性を開示するという点においてである。次に、「変容」のもう一つの意味は、この世の終末に神によって復活する人間の身体であり、これは伝統的に生前の肉体と同一とされている¹¹⁾。ここで重要なことは、両者とも自らの身体のまま変容しているということである。つまり身体そのものが変容するのであって、精神の復活でも精神の超越でもない。

このようにキリスト教において独自の意味を持つ「変容」だが、アドルノがどのような意味をこの形容詞に込めているかを正確に知ることは叶わない。しかし、上述のミニヨンの顔の輝きという点を加味するならば、そして自らミニヨンの歌を例として提示しつつも *glänzen* ではなく *verklärt* を用いているということに重きを置くと、マタイ 17章 1-8節に示される、神性の自己開示に際するイエスの輝きを伴った変容を意識していると推測することができるのではないだろうか。もっともこのことは推測の域を出ることはなく、もしかしたらアドルノは、イエスの復活を考えていたり、はたまたアドルノが高く評価していた作曲家シェーンベルクの『浄夜 *Verklärte Nacht*』から影響を受けたのかもしれない。ただし確実に言えることは、キリスト教神学的な変容という発想をアドルノが自身の思想に持ち込んでいる可能性があるからと言って、決して神学的に形而上学や身体を捉えようとしているわけではない、ということである。したがって、アドルノが「変容した身体」という言葉に独自に込めた意味の把握が目指される¹²⁾。

では、身体そのものの変容とはいかなる状態を指すのか。もちろん、上述のようにここではキ

リスト教的な救済が目指されているのではない。むしろアドルノは、身体のイメージを否定的に捉え直すことにその可能性を見ている。

身体を把握し直すこととは、身体が主体に固有のものでありながら主体の思い通りになるものではないという両義性の把握を意味する。なぜなら身体は「収容所において精神や、その客観化としての文化といったいかなる慰めになるものを、一切の慰めなしに焼却する」(6-358) ような「苦しみの舞台」(6-358) だからだ。疲労も飢餓も認識に還元される以前に身体感覚であることを思い起こせば、収容所において自らの身体が「苦しみの舞台」となることは想像に難くない。そして「苦しみの舞台」としての身体最たる例として拷問が挙げられる。どんな慰めも無意味なほど直接的に与えられる拷問の痛みから解放されるためには身体を手放すしかないが、もちろん主体は身体を捨てることはできないのである。逆説的に、身体がどうしようもなくわたしのものだと感じられる瞬間とは、そのように身体が思い通りにならない、つまり制御不可能なものであることを苦しみによって自覚させられるときだと言えるだろう。すなわち、痛みが自分の身体に生じているものでありながらも、自らとは距離を持ったもの、自らに同一化することが叶わない「非同一なもの」として現れることによって、われわれは自らの身体と向き合わざるを得なくなる。

確かに身体は主体に固有なものとして与えられている。しかし同時に、身体は決して主体の思い通りにはならない。むしろ自分の思い通りにならない制御不可能で煩わしい「苦しみの舞台」として身体が自らに立ち現れてくるときにこそ、身体固有性もまた理解される。この身体両義性こそが、「変容した身体」の意味するところではないだろうか。前節ですでに述べたように、主体は認識を自己反省によって意図的に手放さなくてはならない。「変容した身体」は、身体固有性と制御不可能性という矛盾によって、自己反省を主体に要請する働きを持つ。この要請を受け取るためには、身体が有する矛盾をそのままにしておかなければならない。

身体は完全に私の思い通りになるものである、と言うこともできないし、身体は一切思い通りにならない、と言うこともできない。つまりアドルノは、両義的な身体というイメージを布置において把握することを通して自己のうちにある同一性と非同一性を捉え直すことに、主体の、そして形而上学の希望を見出していると考えられる。イエスの身体が神性を自己啓示するにあたり光り輝くように、あくまでも自分のものであるはずの身体のうちに非同一なものを見出すことによって、つまり身体そのものを変容させた形で捉え直すことで、アドルノは形而上学を唯物論的に、客体の同一化を反省するものとして再構築しようとしているのだ¹³⁾。

3. 「唯物論的形而上学」に向けて

アドルノは自らにとって固有なものである身体に同一性と非同一性の両方を見出し、両義的なものとして身体を捉え直すことによって同一化という主体の思考様式を乗り越えようとする。ゆえに身体がアドルノの議論全体の中で果たす役割の大きさは疑いようがない。そして身体に立脚

することによって、アドルノが目指す唯物論的形而上学の可能性が開かれるのである。しかし、ただ身体を重視することのみによって唯物論的形而上学が十全に可能となるわけではない。唯物論的形而上学がいかにして可能なのか、言い換えるならば、思弁的形而上学に陥らない仕方、どのように絶対者について語る事が出来るのか、という話は、依然として疑問のまま残されている。

唯物論的形而上学ではどのように無限な絶対者について思考することができるだろうか。上に批判したように、絶対者そのものを思考することは、絶対者を有限な人間の制約の内理解することであるから失敗する。このアポリアを抜け出すためにアドルノが提示するのは、絶対者を思考しない仕方、絶対者を表現するという矛盾したものである。したがって最後に、『美の理論』や幼少期についてのエッセイなどの内容も踏まえながら、唯物論的形而上学を可能にするためにアドルノがどのように絶対者を表現しようとしていたか、という問いに対する道筋を立てて論を終えることとしたい。

絶対者の表現のためにアドルノは超越性ではなく「存在するもの *das Seiende*」を「星座的布置 *Konstellation*」のうちで把握することを求める。しかしなぜそれが絶対者の表現になるのか。絶対者についての思考において、「存在するもの」を素材とすることは、むしろ世界の事物に絶対者を同一化させてしまうのではないか、という批判が生じるかもしれない。しかし素材は要素に過ぎず、それだけで絶対者の表現となることはない。それゆえ「存在するもの」を星座的布置に置くとき、単に「存在するもの」以上のものが、つまり絶対者が現前することとなるとアドルノは考える。

例としてピカソの《ゲルニカ》を挙げよう。《ゲルニカ》は、ナチス・ドイツ軍が行ったゲルニカへの無差別爆撃への抗議として描かれた作品である。攻撃から逃れようとする人や動物の姿を大胆に変形させたことで強調されるその表情や動作は、否応なしに鑑賞者の心を打つ。しかしわれわれは、《ゲルニカ》のどこに感情を動かされるのだろうか。殺された子供を抱き絶叫する女性か、それとも這うように逃げる女性か。もちろんそれら一つ一つは重要な要素である。しかし、絵画の一部分だけに強く情動を動かされるのではなくて、《ゲルニカ》という絵画そのものにわれわれは圧倒されるのではないだろうか。つまり、絵の具や線、点といった意味とは無縁なものにすぐさま解体される細部ではなく、統一されたものとして調和した形で現れてくる《ゲルニカ》そのものによってわれわれは感情を呼び起こされる。

しかしこの調和は偽り、見せかけのものである。つまり無意味なものである一つ一つの素材が星座的布置に置かれることによって、《ゲルニカ》は瞬間的に統一した仮象となり、鑑賞者を圧倒する。仮象を指すドイツ語 *Schein* は、外見、見かけ、うわべという、本当はそうではないという意味を暗に含む名詞でありながらも、光、輝きといった肯定的な意味合いを持つ。アドルノはこの二重性を用い、芸術作品が見せかけの統一体であるが故に逆説的に真理の現れとなると考えるのである¹⁴⁾。このように、「存在するもの」であるカンヴァス、色、点、線の布置を通して、瞬間的に《ゲルニカ》は真理の現前となるのである¹⁵⁾。

存在をただ星座的布置 **Konstellation** にもたらずことによつてのみ、芸術作品は語る。……芸術作品それ自体が絶対的なものであることも、絶対的なものが芸術作品の中に直接的に居合わせることもない。この〔両義性の〕分有のために、芸術作品は盲目となり、真実について語る芸術作品の言語をただちに曖昧にしてしまう。(7-201)

また、ここで注目すべきは仮象の現れ方だ。アドルノは芸術作品の原型として、束の間のものであり内容に乏しい花火をあげる。花火は「きらめき、たちまち消える文字であるが、この文字はその意味を読みとれはしない」(7-125)。つまりわれわれは真理に出会ったという感覚を確かにもっていないながら、それを把握することはできないのである。

形而上学に話を戻そう。形而上学の素材となるものを与える「存在するもの」は何か。そしてそれはどのように布置されるのか。もちろん形而上学は絶対者についての学であるから、それを単に存在者についての判断の総体として考えることはできない。むしろ、存在者へと同一化することによって絶対者について言及することはできないため、アドルノは判断の留保を重視する。

アドルノが求めるのは、存在するものを把握せずただそれに出会うような、「形而上学的経験」と呼ばれる経験である。それは《ゲルニカ》が瞬間的には統一した全体として鑑賞者に衝撃を与えるような、真理内実を含んだものとして生じる直観的に出会う経験なのだが、アドルノはその例として町の名称が与えてくれる「幸福の約束」を挙げる。アドルノは幼少期、アモールバッハというバイエルン州の町に訪れた際、バイエルン州とバーデン州の境界の中間地帯を好み、統一ではなく州境を示すそれぞれの州の旗で飾られた標柱に平和の約束を見出していたという。この思い出の土地は、アモールバッハである必然性はなかった。他の町の似たような場所でも同様のことを経験し得ただろう。しかしこの経験がアドルノにとってアモールバッハという町を特別なものとした以上、アドルノにとっては、アモールバッハという地名は聞くだけで心が躍るものとなり、アメリカに亡命し文化産業に晒されたあとも「幸福の約束」という真理の現前の可能性であり続けるのである。「それでもなお、ある特定の場所においてのみ、交換不可能な幸福の経験は作られる。後からその場所が唯一ではなかったのだということが明らかになるとしても」(10-305)。

「形而上学的経験」はこのように、超越的なものうちではなく現実の経験のうちに見出される。それは、アモールバッハという町があり、州の境界があり、そこが州の旗で飾られていて、アドルノという主体がそれを経験することによって、つまり存在するものが別個に存在するのではなく、それぞれ関係しあい星座的布置を形成することで、瞬間的に統一し調和した全体となることによって、である。

すでにアドルノによって批判された「思弁的形而上学」では同一化への欲求のうち絶対者そのものの記述を求めるため、また「死の形而上学」では死による本来的自己への回帰という形を取ることで生のあり方、そして経験が重視されないため、形而上学的経験が形而上学の可能性となることはなかった。しかし主体に固有なものとして与えられていると同時に、決して主体の思

い通りにはならない両義的な「変容した」身体を基礎に据える「唯物論的形而上学」においては、形而上学的経験を形而上学という学の範疇に含むことが可能になる。こうして、絶対者を思考しない仕方では絶対者を表現する可能性が生じるのである。

ただし、経験は認識に還元できない非同一なものを含むものであるため、「経験した」という以上のことを述べることが出来ない。それを語ろうとすると、旗であったり街並みであったりといった一つ一つの素材を述べることとなる。つまり「存在者についての判断の演繹的な関連」(6-399)を述べることになってしまう。もちろんそれらの素材がなければアドルノにとっての形而上学的経験であるアモールバッハでの思い出は生まれなかったが、その素材が形而上学的経験の完全な記述となることはないことに留意する必要があるだろう。経験は既に過ぎ去ったものである。瞬間的な幸福の経験をしたと言えど、その経験は一回的なものでしかない。先に引用した芸術鑑賞における事例と同様のことが、形而上学的経験においても起こっている。つまり、形而上学的経験自体は絶対的なものなのでもなく、その経験自体のうちに絶対的なものが直接的に内在しているわけでもないために、経験したはずの真理はすぐさま曖昧で記述できないものとなる。主体はその経験を疑うこともできないが、しかしその絶対性をそのまま信じ続けることもできない。アドルノはこのことを次のように述べる。

形而上学的経験という概念は……二律背反的である。主体の経験に立ち戻ることなしに、つまり主体の直接的なその場への居合わせなしに、形而上学的なものが声高らかに告げられても、それは自らに理解のしにくいものを押し付けられたくないという自律的主体の欲望を前には寄る方のないものである。しかしながら、主体に直接的で明白なものは、誤りの可能性と相対性に苦しむ。(6-367)

したがって「「一体これで全てなのか？」という形で否定的にのみ」(6-368)形而上学的経験は保持されるのであり、唯物論的形而上学も常に、自らの思考の批判的反省を迫られ続ける。このように自らの思考を反省する限り同一化し固定化された概念はその都度解体されるため、「変容した身体」に重きを置く形而上学は、いかにして野蛮状態を防ぐかという問いの応答になり得る¹⁶⁾。そしてそのような唯物論的形而上学は、身体を重視することによって可能になった形而上学的経験を学の範疇に含むという形で応答されるとアドルノは考えていたのではないだろうか。

註

- 1) 「哲学が約束——哲学が現実と同一である、もしくは直接的に現実の回復に立ち会ふのだというものを破ってから、哲学は自らを容赦なく批判せざるを得ない(6-15)」。
- 2) アドルノの形而上学思想についての先行研究としては、先に挙げた杉内(2019)や Zuidervaart(2007)が挙げられる。杉内は『美の理論』に形而上学的思想が伏在していることを指摘し、Zuidervaartはアドルノの形而上学思想を認識論的に解釈したヴェルマーを批判し形而上学をむしろ社会学的と考えることを提唱する。
- 3) このことは『啓蒙の弁証法』のオデュッセウス論で特に語られる。オデュッセウスはポリュペモスというキュクロプスに対して、自らを「ウーティス」、つまり「誰もおらぬ」と名乗る。その結果、ポリュペモスは自分を殺そうとしている者は「誰もおらぬ」としか述べることができず、オデュッセウスはポリュペモスの眼を潰すことに成功し生きながらえる。これが同一化を行う主体性の放棄である。しかしオデュッセウスは興奮からポリュペモスの前で自らの名や素性を打ち明け、ポリュペモスの祈りを聞き入れたポセイドンの怒りを招くこととなる。これが同一性の回復を目指してしまうということの象徴である。このように啓蒙された西洋的合理性は自己同一性が失われるという不安から逃れるために絶えず同一化という暴力を行使し続けるしかない。
- 4) とりわけ批判の中心的対象となっているのはドイツ観念論である。
- 5) Zuidervaart(2007)が、アドルノの死に関する形而上学的な問いが「政治、倫理、宗教をも包括する社会哲学的な問い」であるとするのはそのためである。
- 6) Theodor W. Adorno, "Metaphysik: Begriff und Probleme (1965)", Herausgegeben von Rolf Tiedemann, Suhrkamp, 2006, p. 207.
- 7) ただし、死の形而上学が無力であることは、死について考えることが無意味だということを示しているのではない。むしろ死には希望が付随していることをアドルノは述べている。「死の経験は何らか次のようなものがある。精神の独立と結びつくような瞬間、それと同時に、しかし精神がまさに遠くへと身を振り解き、われわれが単に存在するものから非常に独立するようなものが。そしてまさにそれゆえに何らか、それが全てではないはずだという希望のようなものが、死にも付随する」(Theodor W. Adorno, "Metaphysik: Begriff und Probleme (1965)", Herausgegeben von Rolf Tiedemann, Suhrkamp, 2006, pp. 207-208)。この「それが全てではないはずだという希望」とは、主体が死を逃れられない限り何一つとして「これが全てである」ということはできない、ということである。この一見矛盾した希望は、アドルノが求める同一化の放棄へと結びつく。死は確かに疎外されたものとなり、突発的に経験されるものとなったが、それでもなお人間は死すべき存在である。したがって主体は死を逃れられない限り、今生きている自己のみが自己そのものの十全な状態であると主張することはできない。その自己同一性のうちに死を含んでいないからである。このような「これが全てではない」という否定的な形で、むしろ自己同一性は解体され、思考の同一化も解消されていく。これがアドルノの考える「希望」であり、それは死に付随したものでありながら、やはり生のあり方に関わっている。このことは第3章以降で展開する内容と類似している。
- 8) 本稿の主題からは逸脱するため扱わないが、アドルノは認識論的にはこの事態を「客観の優位 vorrang des Objekts」と呼ぶ。主観と客観の間には思考するものと思考されるものという差異があり、これは対立でもあるが、主観は主観だけでは主観たり得ず、客観もまた主観がなければ客観ではないとアドルノは考える。なぜなら主観の成立のためにはそもそも客観が前提として必要だからだ。認識する主観は身体的契機を伴わねばならず、身体的契機は決して主体のみによっては起こらない。全ての認識のきっかけとして必ず身体が必要であることは上に述べたが、同時に身体がなんらかの感覚を

催すための対象も必要だ。この点において、主観の成立のためには対象としての客観、すなわち非同一なものが求められる。主観が客観を作り出すのではなく、客観によって主観が要請され、経験するものとしてようやく主観が成立するのであり、主観は客観に対して受動的である。ただし客観の優位は主観-客観という二元的理解を脱するものであり、決して主観を客観の下位に置くものではないということに留意する必要がある。なぜならそもそも客観が「非同一的なものの肯定的表現」(6-197)だからだ。つまり客観の中でも主観によって回収し概念として把握され得ないものこそ客観と呼ばれるのであって、主観による同一化がなければ客観は客観として現れない。身体的契機を持たない認識はないため、主観は既に客観と混ざり合っている。その上で、「客観の優位には、主観の反省、しかも主観への主観的反省が唯一到達できる」(6-186)。停止してしまえば客観を主観に還元し肥大化してしまう主観は、主観自体に対する内省によってのみ唯一それを脱し、客観の優位という事態に留まることができる。したがって主観と客観は、究極的な統一でもないが、第三者によって規定されるような絶対的な二元性を有しているのではない。主客のヒエラルキーを除去し、主観-客観という弁証法に留まり続けることこそが客観の優位という事態である。このことについては、例えば河原理「客観の優位」について：アドルノ哲学における「身体的なもの」、『年報人間科学』第20巻、大阪大学人間科学部社会学・人間学・人類学研究室、1999年、pp. 97-109に詳論されている。

- 9) 「客観の優位への移行を通じて、弁証法は唯物論的になる」(6-193)。なおここで唯物論的という言葉はとりわけフィヒテヤヘーゲルのドイツ観念論に対置する形で使用される。
- 10) 同様の話がマルコ9節2-13、ルカ9節28-36にもあり、全てタイトルは同じ“Die Verklärung Jesu”である。
- 11) cf. 佐藤朋之著、『キリスト教・カトリック独和辞典』、上智大学出版、2016年、p. 402。なお、一般にイエスの変容と聞くと十字架につけられたイエスの復活が考えられるが、佐藤によると *verklärt* にその意味はない。また、イエスの復活においてはその身体が生前のものと同一であるかどうかは教義による。
- 12) このことを明瞭に示す文章が、アドルノの講義録に残されている。アドルノは否定弁証法についての講義の初回に際して、神学者であり宗教哲学者であったパウル・ティリヒの死に言及し、次のように述べている。「亡くなった私の友人ティリヒの仕事と生涯において決定的だったこと、すなわち神学的な事柄について語るのは私の仕事ではないし、私にはその資格もない」(Theodor W. Adorno, “Vorlesung über Negative Dialektik”, Herausgegeben von Rolf Tiedemann, Suhrkamp, 2003, p. 10)。
- 13) ただし、変容した身体のうち形而上学の希望を見出すことは、身体に希望が内在していることとは同一ではない。アドルノは “Hoffnung aber heftet sich an den verklärten Leib” と記しており、動詞 *heften* は仮とじする、仮縫いする、ピンなどで止める、といった意味を持つ。身体のうち希望を見出すのはあくまでも自己反省を通じてのものであることが強調されているのではないだろうか。
- 14) 仮象としての真理の瞬間的な現前という考えは、『否定弁証法』にも共通して記述されている。例えば「仮象のうちには仮象なきものが約束される」(6-397) など。
- 15) アドルノの仮象概念については、高安(2016)を参照されたい。
- 16) アドルノの形而上学思想は確かに『否定弁証法』に中心的に論じられているが、アドルノの形而上学ないしは哲学への基本的関心とその理念が初期から一貫している。例えばアドルノの重要な初期公演「哲学のアクチュアリティ」において、「哲学はいつもいつも、しかも真理への要求とともに、解釈の確かな手がかりを所有することなしに解釈し続けなければならない」(1-334) という発言が見られる。

引用・参考文献

一次文献

Suhrkamp 社より出版されているアドルノ全集 Theodor W. Adorno, *Gesammelte Schriften* Bd. 1, 20 (Suhrkamp. 1970/1986) からの引用箇所は、本文中のカッコ内に表示する。前の数字が巻数を、後の数字が頁数をあらわす。

Theodor W. Adorno, “*Metaphysik: Begriff und Probleme (1965)*”, Herausgegeben von Rolf Tiedemann, Suhrkamp, 2006.

Theodor W. Adorno, “*Vorlesung über Negative Dialektik*”, Herausgegeben von Rolf Tiedemann, Suhrkamp, 2003.

なお訳出にあたり、既出の英訳・邦訳を適宜参照した。

その他の文献

Johann Wolfgang von Goethe, “*Wilhelm Meisters Lehrjahre*”, “*Goethes Werke Kommentare und Register Hamburger Ausgabe in 14 Bänden, Band 7 Romane und Novellen II*”, C. H. Beck, 1982.

——— 『ヴェルヘルム・マイスターの修業時代 (上)』、山崎章甫訳、岩波文庫、2000年。

Lambert Zuidervaart, *Metaphysics after Auschwitz: Suffering and Hope in Adorno's Negative Dialectics*, Donald A. Burke, Colin J. Campbell, Kathy Kiloh, Michael K. Palamarek, and Jonathan Short, “*Adorno and the Need in Thinking New Critical Essays*”, University of Toronto Press, 2007, pp. 137-166.

麻生博之「アドルノ否定弁証法における主観の機能——思惟の自己反省と経験のポテンシャルについて」、『哲学』第48号、日本哲学会、1997年、pp. 297-306。

河原理「『客観の優位』について：アドルノ哲学における『身体的なもの』」、『年報人間科学』第20巻、大阪大学人間科学部社会学・人間学・人類学研究室、1999年、pp. 97-109。

——— 「主観・客観・経験：アドルノ哲学の射程について」、『年報人間科学』第17巻、大阪大学人間科学部社会学・人間学・人類学研究室、1996年、pp. 195-217。

佐藤朋之著、『キリスト教・カトリック独和辞典』、上智大学出版、2016年、p. 402。

杉内有介「〈我が望ミ空シカラマジ〉——アドルノ美学の消失点としての形而上学」、藤野寛・西村誠編『アドルノ美学読解 崇高概念から現代音楽・アートまで』、花伝社、2019年、pp. 52-74。

高安啓介「アドルの美学における形象の問題」、『形象』、形象論研究会、2016年、pp. 56-77。

藤野寛「アドルノにおける Ästhetik/Ethik」、藤野寛・西村誠編『アドルノ美学読解 崇高概念から現代音楽・アートまで』、花伝社、2019年、pp. 19-51。